

第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『母推す息子』

東京都

櫻井 聖義

母推す息子

櫻井 聖義 (さくらい たかよし)

気づいた時には「推し」という言葉が、世間で流行していた。僕の友達の多くは、好きな俳優や、アイドルに対してその言葉を使っていた。たまに、プロ野球選手に対してその言葉を使っている友達もいた。

ある時、友達から「お前の推しって誰？」と、まるで仲良くなるための通過儀礼のように聞かれた。僕はアイドルや、俳優にあまり夢中になれる性格ではなかったため「推し」という言葉は、自分から随分と遠いところにある言葉だと感じていた。友達からの質問にうまく答えることができず「逆に誰か推している人いるの？」と僕は聞き返した。友達は嬉々として、推しの好きなところについて話してくれた。僕はその日の帰り道、推しがいいこと、愛情を注ぎたいと思える人がいないことを少しだけ寂しく思った。

家に帰り、僕にも誰かいないものかと考えた。たった一人、頭に浮かんだが、果たして、推しと呼んでもよいのかわからず、何度か頭の中で取り消した。しかし、考えるたびにその人物しか浮かんでこなかった。それは、離れて暮らす母親だ。

幼少期や、学生時代、僕は、母のことをあまり好きではなかった。ケチで横暴で、僕のことを何一つわかってくれないと思っていた。今では自分でも信じられないが、そんなことを本気で思っていたのだ。小学生の頃に僕は何度も家出をした。きつかけはいつも稚拙なことだった。「母が勉強しなさい」としつこく言ってくるから」「ゲームを没収されたから」等、今思えば何故それが家出に繋がったのか、あまり理解ができない。しかし、当時は逃がたい気持ちが強かったり、もっとわかりやすい愛情が欲しかったのだと思う。

家出をしても、行く宛てなんてどこにもなかった。外は暗く、出歩いている友達もいない。そして、家出はいつも中途半端なまま終わりを迎えた。面白くなさそうに帰宅した僕に、母は「お腹空いてるでしょ」と言ってお飯を作ってくれた。もし本当に母が、ケチで横暴な人間であれば、そんなことしてくれるはずもなかった。

二十歳になった僕は、実家を出て一人暮らしをすることを決めた。たいした理由もなかったが、実家にいるのが少しだけ窮屈に感じたからだ。母と不動産屋へ行き、めぼしい部屋の内見を何軒か済ませ、その中の一部屋と契約をし、大屋さんから鍵を受け取った。部屋は木造、六畳のワンルーム。実家よりは随分と窮屈な部屋だったが、そこには実家で味わうことのできない自由が広がっていた。

最低限の家具も一日で買い揃え、その日は実家に帰った。「明日からついに一人暮らしが始まる。一番最初は誰に来てもらおうかな」と布団の中で妄想にふけていた。そして、家を出る日を迎えた。そこで僕は、三十二歳の今でも心に残っている言葉と出会うこととなる。その日の朝、僕は母よりも早く目を覚ました。居間でいつものようにテレビを見ているとテーブルの下に一冊の手帳が転がっていた。なんとなく手に取り、中を開くと、それは母親が書いていた日記だった。日記を書いていること自体、知らなかった僕は少し驚いた。

罪悪感もありながら、気づいた時には母の日記をしっかりと読んでいた。かなり昔から日記をつけていたようで、僕が専門学校に入学した日のことや、口喧嘩をした日のことなどが

書かれていた。そこには、昨日のことも書かれていた。不動産に行ったことや、家具を一緒に買ったことなどが書かれている。その最後の一文に「明日で息子が家を出ていく。寂しいな。短い子育てだったなあ。」と書かれていた。

父は僕が四歳の頃にいなくなっており、母親はそこからたった一人で僕を育てた。食べ盛りのため、一生懸命仕事をし、家に帰れば機嫌の悪い反抗期の僕がいる。そんな子育ては、何よりも大変だったはずなのに、母はそれを「短い子育てだった」と表現したのだ。これ以上ない愛情を捧げられていたことに、僕はそこでようやく気が付いた。

少し後に、母が起きてきた。いつも通り、朝ごはんを作ってくれ、家を出る僕を駅まで見送ってくれた。母は、寂しさを感じさせないほどの笑顔で「お腹空いたら帰っておいで」と手を振っていた。